

すべて物小なるをさ、やかといひ、小石をさ、れといへれば、小苗さなへ月といふべきを中略して、さ月とはいふなるべし、猶卯花月をうづきといふが如し、さなへといふは、文字早苗とのみふるくより書たれども、小苗の義しかるべし、いかにとなれば、早苗ははや苗の義也、はや苗といふは、今いふ早稻ウツキの事なり、歌にかつしかわせなどよめる、わせといふべきを、早稻晚稻をしなべて、苗を植るを、さなへとるといふは、わせおくての差別なきに似たり、早稻の苗を植るを、早苗とるといは、あたれり、晚稻の苗を植るを、早苗とるとはいふべからず、さなへとはささなへといふ語の、下略とおもはる、小苗と書せば、早稻晚稻をしなべて、さなへとるといひてもしかるべし、凡さなへ植る事は、土地により、早晩の差別はあれど、大かたは五月にもはら植るなり、古人さ月の訓義をとくこと、まちくなれども、多くさなへ植月といふ義に説をたて、さなへの訓義に、心づかざりしなり、さて萬葉集より後の書に、さつきといふ名目のみえしは、古今集さつきまつ山はと、ぎすとよめる歌をはじめとして、後撰集拾遺集以下代々の勅撰に出たり、五月といふ義を解るは、田うふる事、さかりなる故に、早苗月といふを誤れりと、抄典義みえしぞはじめなる、八雲御抄には、五月さつきとのみしるし給ひ、又五月さつき、さみだれ月なるよし、古説にみゆ、されどもさみだれをさとのみ一言にいふ事、あまりの略言にや、此月を早苗の頭とすれば、さなへの略言かともみゆ、既に或説にしかいへりと、類聚名いひ、五月をサツキといひ、又世の人今もなをつ、しむべき月也、なごもいふ也、此月の事は、舊事記にみえし所なれば、古の時の名也、けむともしらる、也、サツキといふ事は、早苗とる月なれば、早苗月と云しを、サツキとはいふ也、といふ説も、いかゝあるべきと、東雅いへるはいぶかし、五月稻苗月也と、海部光いひ、五月の和名をさつきといふ、田うふる事、さかりなるゆへ、さなへ月といふと、日本歳時記いひたり、此月の異名も、授雲月、又たぐさ月と、秘藏いひ、賤男染月、又月不見月、又橘月、吹喜月と、藏玉いへり、さて又仲夏と、和名類聚いひしは、